
心の力

やまもの

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

心の力

【Nコード】

N2961H

【作者名】

やまもの

【あらすじ】

魔人のセイクと人間の中で暮らして自分が魔人だと気づいていないイーラの壮大なファンタジーです。

プロローグ 老人の独り言（前書き）

魔人の世界へようこそ！ と私は心からあなたを歓迎します。これから長編となりますがよろしくお願いします。

プロローグ 老人の独り言

一人の青年が立っていた。

その少年は黒髪であった。顔は青年であったが、なぜか彼の黒い瞳は青年らしさがなく、いろいろな苦境を体験し、多くのことを学んだことを物語っていた。

彼はずっと先の先を見つめていた。

まだ待たなければならぬのか……。もう何年も待っているのに……。

もう多くのものが死を迎えたというのに……。

彼はそんなことをずっと考えていた。

そうしていると、どこからともなく老人が彼の前に現れた。

その老人は見た目はかなり歳のいった老人であった。しかし彼の瞳には若々しいエネルギーが宿っていた。

「もうすぐじゃ。準備を始めようかのう。」

と穏やかな表情で彼に言った。

少年の顔が喜びで満たされた。

「これで終わるんだよな？」

と彼は老人に聞いた。

「わからぬ。じゃが、何かが変わるじゃろう。いい方向かもしれぬ。しかし、悪い方向かもしれぬ。」

老人は冷静に言った。

「たしかに……。だからお前にはかなわないぜ。俺は考えが足りない。」

「君は、自らが言うほど『考え』が足りないわけではないとわしは思うが？」

「あんたにそう言われるとうれしいぜ。」

少年は微笑んだ。

「おお、もうその時が近いぞ。準備をせねばな……。君に彼女を

「任せていいんじゃない？」

老人は少年に訊いた。

「もちろんだ。」

「結構。」老人は微笑んだ。

その頃ある少女が出発しようとしていた。

そして、近くには老人が立っていた。彼は、

「彼女の名前はイーラ・カーラント。これから壮大な旅をすることになる人間じゃ。さあどうなるかのう。わしの手助けはいらないといいのじゃが。」

ブローグ 老人の独り言（後書き）

老人の独り言は最後だけです。まあちよくちよく老人は出します。ブローグということですからこれからも続けて行きますのでよろしくお願ひします。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2961h/>

心の力

2010年10月26日02時37分発行